広報　ちぇなっぷ

※アーチルは「仙台市発達相談支援センター」の愛称です。
こどもから大人まで、発達障害のある方の支援を行っています。
※ちぇなっぷは「CHIN UP！（前を向いて）」の意味です。

CHIN UP

archil news

令和８年１月
第 39 号

「育ち」と「くらし」を支えるために

平成 14 年のアーチル開所以降、育ちにくさや生活のしづらさなどの生活上の困りごとの背景に発達障害を心配される多くのご相談をいただいており、令和6年度の相談件数は 12,371 件、このうち初めてアーチル相談につながった新規相談件数は 1,980 件でした。

また、乳幼児期・学齢期のお子さんのご相談は、全体の約８割を占める状況となっており、乳幼児期に関しては、出生率が低下するなかでも、多くのご相談が寄せられております。

現在、保育や学校等の様々な分野でインクルージョンの推進が掲げられており、今後ますます、発達特性のあるご本人が日々過ごす様々な場所（地域）において、ご本人に普段関わる方たちが、ご本人の特性を理解し、必要な支援を行っていくことが求められております。

一方、これまで仙台市が整備してきた就学前の療育支援体制については、出生率低下や共働き世帯増加等の社会情勢の変化や、児童福祉法改正による児童発達支援センターの役割・機能を強化していく方向性を踏まえ、改めて本市の現状を確認するとともに、今後10年を見据えたあり方の検討を行っていくこととなりました。

アーチルが相談機関としてできること、療育等の支援機関ができること、毎日の過ごしの場だからできること、それぞれに役割があると思いますが、ご本人と接する多くの方たちが共通の理解をもとに、ご本人の『育ち』とご家族を含めた『くらし』を支えることができるよう、引き続き、ご本人を真ん中に、多くの関係機関や地域の皆さまとの連携・協働をすすめてまいります。

南部アーチル所長　五十嵐　美香子

「アーチル発達障害基礎講座」がせんだい Tube にて配信中です

発達障害に関する基本的な考え方等について、説明しています。令和８年３月 31 日（火曜日）までの配信となっておりますので、ご興味がある方はぜひご覧ください。

〈第１部〉「発達障害の基本的理解」

講師：北部・南部発達相談支援センター　主幹　久保田　由紀（小児科医）

〈第２部〉「アーチルの役割機能と関係機関との連携による地域支援」

講師：北部発達相談支援センター　地域支援担当課長　成見　憲介

受講はこちらから

北部アーチル大規模改修工事は無事完了しました。ご理解・ご協力ありがとうございました！

アーチル療育セミナーを開催しました！

日時：令和7年8月7日（木曜日）　14時～

場所：日立システムズホール仙台　シアターホール

第１部　講話　「障がい児・者と家族への支援」

講師：髙橋　脩　先生（豊田市福祉事業団理事長・児童精神科医）

第２部　対談「仙台版　地域とともに進める発達支援」

開催報告は裏面をご覧ください！

「地域とともに進める発達支援」

令和7年8月7日(木曜日)に、アーチル療育セミナーを開催しました。豊田市福祉事業団理事長・児童精神科医の髙橋脩先生を講師としてお招きし、当日は定員を超える約400名の方にご参加いただきました。この記事では、第2部の対談での髙橋先生のご発言について紹介します。

当日の資料は、こちらからご覧いただけます。(アーチルホームページ)

講　師　紹　介

髙橋（たかはし）　脩（おさむ） 氏（豊田市福祉事業団理事長・児童精神科医）

1972 年に鳥取大学医学部を卒業後、長年にわたり障害児医療・福祉に携わる。国立鳥取療養所、愛知県心身障害者コロニー中央病院、東大阪市療育センターなどで勤務した他、オーストラリア・シドニー市の病院での研修なども経て、1996 年より豊田市心身障害児総合通園センター、豊田市こども発達センターのセンター長に就任し、2015 年からは豊田市福祉事業団の理事長となり、現在に至る。

蔦森所長

支援をする中で、こども本人への支援と同じかそれ以上に、家族支援が重要だと考えています。その中でも、保護者がこどもの特性を理解し、子育てに自信を持てるように支えることが必要です。「**保護者支援**」について先生のお考えをお聞かせください。

こどもの変化に気づいた際は、**「保護者との信頼関係を築いた上で、保護者自身の気づきを待つこと」**が大切です。診断後も支援の始まりとして、関係機関と連携して**「保護者の心情に寄り添いながら」**支えていくことが重要です。そのためには、支援者が**「共通の認識」**と**「支援の考え方」**を持ち、同じ方向を向いて協働することが必要です。また、こどもを**「有能な存在として尊重」**し、その**「育ちを支える立場」**であるという理念を共有する必要があります。

髙橋先生

蔦森所長

10年先を見据えて、支援システムの再構築が必要になってくるとおっしゃっていましたが、今後、仙台市の支援システムを見直すにあたり、ご助言をお願いします。

仙台市のように、発見から療育、保育、教育、就労までを一貫して支援できる仕組みを整えた自治体はほとんどありません。また、特別支援教育経験のある教員が配置され、教育との連携を担っていることは他の都市にはない特徴です。

少子化が急速に進む中で、一元的にアーチルで管理するのが難しくなっていると思われますが、今後は**「地域の学校や施設と協力して進める支援への転換」**が求められます。アーチルや児童発達支援センターが地域へ出向き、地域の方と一緒に保護者自身の気づきの支援を行うことで、本人・家族に十分な支援が受けられるお手伝いをするとよいでしょう。そのためには、支援者全体でその認識を共有し、各機関が得意分野を活かし、不得意な部分は他機関がお互いに補完していく支援を実現していくことが大切になります。

髙橋先生

≪発行元≫　仙台市北部発達相談支援センター・仙台市南部発達相談支援センター
≪ホームページ≫
https://www.city.sendai.jp/kikakusomu/kurashi/kenkotofukushi/shogai/shien/shiencenter/sodanshien/index.html
※この広報紙についてのご意見・お問い合わせ：仙台市北部発達相談支援センター　企画調整係　☎022-375-0110